

已然形についての一・二の問題

吉 永 登

第一章 已然形の逆接表現について

一

用言の已然形が助詞バまたはド(ドモ)を伴って、確定条件の順接句を作ったり、逆接句を作るとは改めて言うまでもない。また本来はそうした助詞を伴わないで、確定条件の順接句を作ったことも知られた事実である。たとえば

……さ婚ばひに あり立たし 婚ばひに あり通はせ(バ) 太刀が緒も 未だ解かずて……(古事記、二)

……黄金かも たしけくあらむと 思ほして した悩ますに 鶏が鳴く 東の国の 陸奥の 小田なる山に 黄金ありと 申し給へれ(バ) み心を 明らかめ給ひ……(巻二十、四〇九四) 家人の齋へ(バ)にかあらむ平らけく船出はしぬと親に申さね

(巻二十、四四〇九)

などがそれである。傾向としては長歌に多く、短歌のばあい自由さ

を欠くように見えるのは、この用法がはやくから安定を欠いていたことを物語っているのではないだろうか。

ところで、佐伯梅友氏は已然形は例こそ見当たらないが、それだけで確定条件の順接句を作ると同時に逆接句をも作ったはずであると推定した。その後、宮嶋弘は二つの例をさがして佐伯氏の推定を実証したのであるが、今日ではそれが一般に認められて定説となっている。しかしわたしは宮嶋のあげた例に承服できないものがあるので以下そのことについて論じることにはしたい。

二

万葉集に

大船を荒海に漕ぎ出で八船だけ、我が見し子らが目みはしるしも

(巻七、一二六六)

という歌がある。この歌に見える「八船だけ」は古来難解とせられていたのであるが、鴻巣盛広は全体を

大キイ舟ヲ荒海ニ漕ギ出シテ、危イ所ヲ骨折ツテ漕イデ行クヤウニ、苦シイ思ヲシテヤツト私ガ遭ツタ女ノ、目ツキガハツキ

リト目ノ前ニ見エテ忘レカネルヨ。(万葉集全釈第二冊、四〇)

と解し、「八船たけ」については、注のところで

多氣は土佐日記に「ゆくりなく風ふきて、たけどもしりへしぞきにしぞきて、ほとほとしくうちほめつべし」とある、「たけども」と同じで、舟を漕ぐことである。……この句は頻りに舟を漕ぐことで、辛苦しての意(同書第二冊、四〇五ページ)と云っている。

「たけ」が漕ぐ意味のことばであるらしいことには異論はない。しかし三句までを本筋とかかわりのない序として扱っているのはどうであろうか。訳文としては、一応筋は通っているようであるが、「たけ」を連用形と見、したがって下二段活用の動詞と解しているらしい点にも疑問がある。

土佐日記の「たけ」は言うまでもなく已然形で、したがって四段活用の動詞である。時代の違いと言つてしまえばそれまでであるが、活用の変化の順序から考えても、うなずけないものがある。それに序としての三句から四句への移りに自然さを欠いているのも気にならぬでもない。今日この解を踏襲する注釈書のないのは、やはり捨てられるにはそれだけの理由があつたのではないだろうか。

この「たけ」が四段活用「たく」の已然形であり、これこそさきにも触れた佐伯氏のいう已然形だけで、確定条件の逆接句を作る例であるという意見を述べたのははかならぬ宮嶋であった。すなわち宮嶋は

これは新考に「第三句に云々すれどといふ事あらでは四五句と打合はず。されば八船タケの下に矜の字などのおちたるなるべし」といひ、或は全釈に「多氣は……『たけども』と同じで」

と云つてゐる(吉永言う、これは宮嶋の誤解であるが、全体にはかわりがない。)やうに、どうしても「多氣ド」といふ風に考へなければ、一首の意味は出て来ない。……普通なら漕ぐことに一心になるから余念がなく、「子らがまみ」が頭に浮かぶ筈がないのである。それが今の場合、妹に対する心が切であるから、それにも係らず「まみはしるしも」なのである。かう解してこそ恋の歌である。然れば、ここに已然形で言ひ放つた用法は……逆接にもなることになる。(「万葉集の語法二つ」京都帝国大学国文学会記念論文集一八〇ページ)

と云つてゐる。この考えは今日では諸注釈書に採用せられ、古典文法における定説となつてゐるようである。

宮嶋のいうところは、しきりに漕いで行くからには余念のあらうはずがない。しかるに現実には妹の面影が浮んできて余念があることになる。それほど女の印象が強烈なのであるが、そうした矛盾する二つの文を結びなると逆接条件法を用いなければならぬと言ふのである。一応もつともなことを言ひえよう。しかしそれでは次の歌などをどのように考えたらよいのであろうか。

角鹿の津にして船に乗る時、笠朝臣金村の作る歌一首并びに短歌(短歌略す)

越の海の 角鹿の浜ゆ 大船に 真幌ぬきおろし いきなり
海路に出でて あへきつつ わが漕ぎ行けば 丈夫の 手結が
浦に 海人をとめ 塩焼く煙 草枕 旅にしあれば 独して
見るしるしなみ 海神の 手に巻かしたる 玉禰 かけてしの
ひつ 大和島根を

右の長歌は圈点を施した「ば」を中心に、前件は「あへきつつ」

漕いで行くのであるから、宮嶋流に解すれば余念がないことになる。しかも後件ではあれこれと故郷のことを思っているのであるから、これは大いに余念があることになって、条件は問題の「八船たけ」のばあいと変りがない。しかるに右の長歌には「行けば」とあつて順接条件であることに疑いはないのであるが、「八船たけ」のばあいは、助詞「ば」も「ど(とも)」もついでいなくかわらず、逆接条件に解しなければ歌にならないと宮嶋は言うのである。その理窟からすれば、右の長歌は歌にならないことにならう。一体そんなことがあつてよいのであらうか。

三

万葉集には次のような歌がある。

…：朝風に 船出をせむと 船人も、水手も声呼び 鳩鳥の
なづさひ行けば 家鳥は 雲居に見えぬ あが思へる 心なぐ
やと 早く来て 見むと思ひて 大船を 漕ぎ我が行けば、沖
つ波 高く立ち来ぬ…：(巻十五、三六二七) 遣新羅使
鳥がくり我が漕ぎ来れば羨しかも大和へ上る真熊野の船

(巻六、九四四) 山部赤人

右の二首は傍点を施したことは通りに解すればどちらも作者自身
が漕いでいることになっている。しかし前者についていえば、作者
は遣新羅使の一人、しかも専門の漕ぎ手である水手もいるのに、ど
うして自ら漕ぐことがあるうか。また後者にしても作者は山部赤人
である。けつして身分のある役人ではないのであるが、それにして
も瀬戸内海を自ら漕ぐことなど考えられないことであらう。もちろ
ん船遊びともなれば話は別であるが、これらの歌はそうした時の歌

でない。

自ら漕いでいないにもかかわらず、あたかも漕いでいるかのよう
に表現する、それが上代というものであつた。随分他人の人格を無
視したようにも思われるが、もともと漕ぎ手など、人の数にも入れ
なかつたのではなからうか。

こうした例にならえば、問題の「八船たけ」の歌も「臨時」の作
となつていたので、多分名もない役人が船旅の途中での体験をその
場に臨んで歌にしたものと思われる。それは個性のない民謡などと
は異つた創作歌なのである。したがつて、たとえ「大船を荒海に漕
ぎ出で八船」を漕ぐとあつても、作者自らが櫓槳を取つて汗を流し
ているのではない。

かくして宮嶋説の漕ぐことに余念がないなどということは当らな
いのであつて、そのことを前提にする逆接条件説は当然再考の余地
があることにならう。「余念がない」ゆえの逆接条件であつた。今
やその前提がくずれた以上、当然用例の多い順接条件として「大船
を荒海に漕ぎ出で八船たけ(へ)」と見ることが改めて取上げられる
べきであらう。かくして全体は

大船を荒海に乗り出して、しきりに漕いで(漕がせて)行くと、
夕べ逢つたあの女の面影がありありと浮かんでくることだ。

と解することにならう。「しきりに漕いで行く」とあつても作者自
身汗を流して漕いでいるのではないことは繰り返した通りであ
る。

次の泊を目指して船は港を離れて行く。そこは夕べ女に逢つた港
である。行きずりの女には違ひないが他人のような気もしない。そ
のせいであらうか、港も家並も視界から去らうとしている今、女の

面影がありありと浮かんで来る、とでもいうのであろうか。ともあれ、そうした境地はすなおに順接条件として、「しきりに漕いで」(漕がせて)行くと」と解することによって、的確に再現できるものと考ええる。

四

宮嶋弘は、ほかにも一例

川渚にも雪は降れれし、(之)宮の内に千鳥鳴くらし居む所なみ

(巻十九、四二八八)

という歌を挙げ、この「ふれれし」を「降れれ(下)し」と解し、全体を

(宮の内にも雪は降つてをり)河渚にも雪は降つてをるが、河渚には居る所が無いので、千鳥が宮の中で鳴くらしい。(京都

帝国大学国文学会記念論文集一八三ページ)

と訳している。この訳文は、「降れれ(下)し」と解して、全体を

佐保川の川洲にも雪が降りつもっているので、御所の内で千鳥が鳴くらしい。居る所がないものだから。(日本古典文学大系

本万葉集四、三八七ページ)

と訳している通説と較べる時、一応は分があるように思われる。それは係助詞「は」を受ける条件句は逆接になるという佐伯梅友氏の説(万葉語研究所収「秋風も未だ吹かねば」)に支えられているからである。しかし、考えてみると佐伯説必ずしも絶対とはいえないように、たとえば

大君は神にしませば、天雲の雷の上にいほりせるかも

(巻三、二三五)

などのごときまったく同じ条件とは言えないまでも「大君は」を受けて、「ませば」と順接句となっているのである。

それに何よりも宮嶋説のよくない点は、通説をも含めて、すなわち順接句・逆接句を通じて、条件句の次に強めの助詞「し」の来ることである。宮嶋は「大君は神にしませば」を例に引いて、この「神にし」は副詞的修飾語「神に」に強めの助詞「し」の添うたものであるが、条件句もまた副詞的修飾語と言えるところから、それに強めの助詞「し」の添うた「降れれ(下)し」の存在が推定せられると言っている。しかし、副詞的修飾語という大まかな分類を対象にして、微妙な助詞の用法を論じることは危険で、他に用例がないということは何といつても宮嶋説の弱みであろう。今日宮嶋説がかえりみられない理由もそこにあるのではないだろうか。もちろん通説の「降れれ(下)し」にしても例外でない。

通説もしくは宮嶋説に対し、代匠記のいう「降れれカ」説、もしくは万葉集略解に引く本居宣長の「降れれヤ」説は、誤字説という負目はあるが、はるかに勝れているのではないかと思われる。わたし自身は代匠記のいう「ふれれカ」説に心引かれるものがあるが、「也」→「こ」→「之」の変化の可能性の高いことを思う時、やはり宣長の「ふれれヤ」説に従うべきでないかと考える。したがって

川渚にも雪が降っているからであろうか、居るところがないので宮の内でも千鳥が鳴いているらしい。

と解することになるのである。実をいうとわたしは「降れれヤ」を反語と見て、川渚にも雪は降っていないのに、(どうしたことであらうか)居るところが無いので……と解したのであるが、当面の

問題でないので、触れないでおく。

五

以上によって、已然形だけで確定の順接条件を作ることとは問題はないのであるが、ほかに逆接条件を作ったとする通説には根拠のないことを指摘した。それでは助詞「ど」「ども」を伴わない以前は確定の逆接条件はどのようなにあらわしたであろうか。言うまでもなく「こそ…已然形」であったこと

昨日こそ、君はありしか(ト)思はぬに浜松の上に雲にたな引く

のごときである。

(巻三、四四四)

第二章 「ねば」の逆接表現について

一

打消の助動詞「ず」の已然形「ね」に助詞「ば」が添えば、確定条件の順接句を作ることには言うまでもあるまい。たとえば

たけばぬれたかねば長き妹が髪この頃見ぬにかかげつらむか

(巻二、一二三)

などがそれである。

ところが同じ「ねば」の形をとりながら

…：太刀が緒も 末だ解かずて 袷をもいまだ解かねば…

(古事記、二)

卯の花も末だ咲かねば時鳥佐保の山辺に来鳴きとよます

(巻八、一四七七)

などに見える「ねば」は、いずれもノニと逆接に訳されている。

この「ねば」がどうして逆接になるかは明らかでないが、その条件については、二つの説がある。一つは

已然形は元来、順接・逆接にかかわらずに用いられる形であるから、(文献以後には適用できないことは前章で述べた)バという接続助詞を伴っても、必ずしもつねに順接の既定条件を表わすとばかりは限らず、この場合(巻五、七九四)「年月も未だあらねば」などは、逆接の…：ナイノニという既定条件を表わす。ネバが逆接の既定条件を表わす場合は、上に多く、年月もいまだあらねば、…：のように、モという助詞を伴う。

(日本古典文学大系本万葉集二、四二五ページ)

という説であり、他は

上代語においては、助詞「ば」が活用語の已然形にいた場合逆接的になる時があります。…：多く副詞「いまだ」またはそれに類する意義の語と呼応して、「ねば」という打消の助動詞と結びついた形で用いられています。(山崎良幸・古典語の文法、二八七ページ)

という説である。もつとも山崎説は啓蒙書のことであるから、すでに誰かによって言われているかも知れないが、差し当っての問題でない。

なお山崎氏のいう「いまだ」に類する語というのは

秋立ちて幾日もあらねばこの寝ぬる朝明の風は袂寒しも

(巻八、一五五五)

き寝そめていく、だもあらねば、白袴の帯乞ふべしや恋も過ぎねば
(巻十、二〇二三)

などの歌に見える「幾日」とか「いくだ」とかであって、不定を意味する副詞もしくは副詞的という点で「いまだ」に通じるものがある。いずれにしても万葉集中三例あるに過ぎない。

二

前章二つの説が一つの現象に対するものであるだけに共に正しいことはないのである。どちらも正しくないか、どちらかが正しいかはない。ところで一つの法則が正しいか正しくないかを明らかにしようとすれば次の二つの角度から見ることがあろう。

1、例外なく適用できること。同じ条件を具えながら、ある時は適用でき、ある時は適用できないというようなことでは、およそ法則などと言えないからである。

2、自らの条件以外では成立しないこと。自らの条件で成立することが明らかになったとしても、他の条件でも成立するようでは、これまた法則の名に値しないからである。

以上の二つの角度から、まず「も……ねば」説について検討することにしたい。「も……ねば」が逆接をあらわすことは、前に挙げた例のほかにも

筑紫船いまだも来ねば、あらかじめ荒ぶる君を見るが悲しき

(巻四、五五六)

などと少くない。もつともこのばあいも例外なく「いまだ」もしくは「それに類する意義の語」を伴っていることは注意すべきであらう。

しかし、何よりもこの説が法則として適格性を欠くことは、前述1の条件を満たさないことである。すなわち「も……ねば」の形を具えながら逆接条件にならないばあいが少なくないのである。たとえば

朝日照る島の御門におほほしく人音もせねば、まうら悲しも

(巻二、一八九)

夢の逢は苦しかりけりおどろきてかき探れども手にも触れねば、

(巻四、七四一)

などがそれであろう。前者は「人音もしないので……悲しい」のであり、後者は「いっこう手にも触れないので……苦しい」という意味である。そこには逆接条件に考えるべき余地は少しもない。もつて「も……ねば」説の当たらないことが知られよう。

一方の「いまだ……ねば」説であるが、これは前に挙げたほかにも

巻向の椀原もいまだ雲居ねば、小松がうれゆ沫雪流る

(巻十、三三一四)

他国によばひに行きて大刀が緒もいまだ、解かねば、さ夜を明けにける

(巻十二、二九〇六)

などの例があり、しかもいつでも逆接条件になって例外がない。したがって、一応法則として適格性を具えていると言えよう。

それではどうしてこんな明白な事実を日本古典文学大系本の万葉集は見落しているのだろうか。わたしたちはそのことを責めるに先立って、今一度2の立場から確かめてみる必要があるのである。

三

現在行われている注釈書を見ると、「いまだ」などを用いないで、「も……ねば」だけで、例外なく逆接条件に解しているものが三例ある。例の多寡など問題でない。もしそうした例がたとえ一つでもあったとすれば、「いまだ……ねば」説は、弱体化することになるのである。あるいはそのことが、性質上触れてはいないが、日本古典文学大系本万葉集の「も……ねば」説の支えになっているのであるかもしれない。しかし他語ならばともかく、すでに法則としての適格性を欠いている「も……ねば」に、そうしたことがあることが不思議である。やはり今一度考えてみる必要があるのではないだろうか。

一つは

秋萩の恋も、尽きねば、さを鹿の声い継ぎい継ぎ恋こそまさされ

(巻十、二一四五)

という歌に見えるものであるが、諸注の「も……ねば」を逆接条件に解して例外がない。もつともよく見ると、それらにも二通りの解釈があるようで、一つは鴻巣盛広の

秋萩ノ花ヲ恋シイト思ツテ、散ルノヲ悲シンダ心モマダ尽キナ

イノニ、男鹿ノ鳴ク声ガ絶エズ統イテ聞エテ、アノ鹿モ妻ヲ恋ウテ鳴クカト思フト、自分モ、妻ヲ恋ヒ慕フ心ガ増シテ来ル。

(万葉集全釈第三冊、三一〇ページ)

という解であり、他は土屋文明の

秋萩に対する恋も、まだ十分満足されないのに、男鹿の声がつきつきにして、鹿に対する恋が増して行く。(万葉集私注第十

巻、二一八ページ)

という解である。両者を比較すれば一見して明らかのように、前半

は共に萩に対する作者の恋であるが、後半は全釈は鹿の恋心に刺戟せられた妻に対する作者の慕情であるに対し、私注は鹿に対する作者の恋となっている。

都合で私注の解から考えることにする。両者に共通する前半の「秋萩の恋」を萩に対する作者の恋と解することは誤りであるが、そのことについては別の機会に述べることにする。それにしても鹿を人が恋うとはどんなことを言うのであろうか。

なるほど万葉集には動物に対し人が恋うと表現している例がないでもない。たとえば大伴家持が愛している鷹に逃げられた長歌に

……招くよしの そくに無ければ 言ふすべの たどきを知ら

に 心には 火さへ燃えつつ 思ひ恋ひ、息づきあまり けだ

しくも 逢ふことありやと…… (巻十七、四〇一一)

など恋うということが用いられたものがある。しかしこれは鷹狩用の愛禽に対する感情としては理解できないこともない。他は時鳥に関するものばかりで比喻歌を除けば

足引の木の間に立ちくく時鳥かく聞きそめて後恋ひむかも

(巻八、一四九五) 大伴家持

多胡の崎木のくれ繁に時鳥来鳴きとよめばはだ恋ひめやも

(巻十八、四〇五一) 大伴家持

明日よりは継ぎて聞えむ時鳥一夜のからに恋ひ渡るかも

(四〇六九) 家持の部下能登乙美

などがある。これらに共通するものは、いずれも聞かれぬことへの恋情であり、多少の誇張があるとしても「恋ふ」本来の意味から著しくはずれているとも思われない。しかし、今のばあいは現に鹿の声が「い継ぎい継ぎ」聞えているのであって、その意味では「恋

ふ」本来の使い方から言っても異例であろう。その上、小鳥以外の動物、特に獣の類に「恋ふ」などと言った例が他にないことも単なる偶然とは言えないのではなからうか。

この萩と鹿との關係を考える上で忘れてはならないことは、萩の花の咲く頃が鹿の発情期で、男鹿が女鹿を求めて鳴くという事実である。時期からいっても萩の花がまず咲いて鹿がつづいて鳴くのではない。したがって、「萩の恋もつき」ない、すなわち萩の花がまず咲いて、それがまだ散らないさきに鹿が鳴くでは事実と反することにならう。そこに再考の余地があるのである。

次に全釈の解について考えることにする。全釈が末句の「恋こそまされ」を妻に対する恋心がつのである、と解することはわたしも賛成である。しかもそのことは全釈の言うように女鹿を求めて鳴きつづける男鹿の声に刺激せられてのものであることは言うまでもない。

私注の解もそうであったが、全釈の解も同じように文章としては矛盾がないのである。そのことがまた何人にも疑われなかったであろうが、一体萩に対する恋もつきないのに……妻を恋う心が増すということとは、どのようなことなのであろうか。文学の世界のことであるだけに、一そう納得のゆかないものがある。それにこのばあいも、私注と同じく萩の花の咲く頃と、女鹿を求めて男鹿の鳴く頃とにズレがあつて事実と反することになるのである。あるいは萩の花の咲く頃が鹿の発情期で、そのために女鹿を求めて男鹿が鳴くという事実を訳者は知らないのもあからうか。

それではこうした通説に見える不自然さをどうすれば避けることができるのであろうか。道は一つ、「萩の恋」の主語を通説のように作者としないで、鹿とすることである。動物の鹿が植物の萩を

恋うなど、その方がむしろ不自然なように思われるが、次のような例がある。

奥山に住むとふ鹿の首去らず妻問ふ萩の散らまく惜しも

(巻十、二〇九八)

男鹿が萩を妻問うなど、おかしさに違いないが、さきにも触れたように、萩の花の咲く頃が鹿の発情期で、男鹿が女鹿を求めて鳴く、そのことを文学的に表現したものにはかならない。理由はともかく妻と見る以上、恋うということは用いられることは当然であらう。

しかし、わたしは今のばあい、「萩の恋」は、男鹿が萩を恋うという意味でなく、やはり萩の咲く頃の男鹿が女鹿を求めて鳴くことと解したい。したがって歌全体の意味は、

萩もまだ散らず、女鹿に対する男鹿の恋も終らないので、男鹿が女鹿を求める声がいきりに聞えて来て、わたしの妻に対する恋心がかきたてられることだ。

となるのである。このばあい、「も……ねば」を逆接条件の、と解すれば通じない。そんなことが通説をして「萩の恋」を人すなわち作者の萩に対する恋と解せしめたのであろうが、それでは話が逆である。しかし、そこに「も……ねば」が逆接条件であるという説が日本古典文学全集本万葉集以前からあつたことを示すものと言えようか。

万葉集ではこの歌の一首おいて前に次の歌が置かれている。

君に恋ひうらぶれ居れば磯城の野の萩萩のきぎ男鹿鳴くも

(巻十、二一四三)

やはり萩の咲く頃の鹿の恋と、夫を恋うことを歌つたものである。作者に男女の違いがあり、表現も順序が逆になっているが、そ

の心境には似たものがあるう。

かくして、通説が「も……ねば」を逆接条件法に解している三首の中、一首が消えたことになる。

四

次に

一年に七日の夜のみ逢ふ人の恋も過ぎねば、夜はふけ行くも 尽き
ねば夜ぞ明けける
(巻十、二〇三二)

という歌を取り上げることにする。この歌に関しては諸注例外なく、「ねば」を逆接条件に解して

一年に七月七日の夜だけ逢ふ牽牛と織女との恋もまだ満たされ
ないのに、夜の更けて行くことよ。(日本古典文学大系本方
葉集三、九四ページ)

と訳している。一見筋が通っているようであるが、やはり疑問がな
いわけでない。

それでは大系本の訳文のどこがおかしいのであろうか。まず簡単
な文章で考えることにする。

a 問題が解けないので、時間が来た。

問題が解けないのに、時間が来た。

右の二つの文は、前者が順接条件であり、後者が逆接条件である
ことは言うまでもない。しかもこのばあい、文としてはどちらも誤
りとは言えないのであるが、表現の自然さは後者逆接条件にあると
いってよい。ことに後者の持つどこか満足しないような語気は、平
凡な前者に較べて、はるかに気分を伝えるものがあろう。

ところで、この解けない「問題」に「むずかしい」という形容詞

がつくと、形勢は逆転することになるのである。すなわち

b むずかしい「問題が解けないので、時間が来た。

むずかしい「問題が解けないのに、時間が来た

となって、さきには平凡のゆえに間の抜けて見えた前者が生きた表
現になり、逆に自然さのゆえにすぐれていた後者が、かえって平凡
な表現となるのである。そこに文章の複雑さがあると見えよう。

このことは、問題の歌のばあいも同じである。すなわち

a' 恋の語らいが終らないので、夜がふけて行く。

恋の語らいが終らないのに、夜がふけて行く。

という二つの文のうち、前者は平凡な報告に過ぎないが、後者はど
こかに無念な気持が感じられるようである。少くとも前者には歌の
求める驚がない。

しかし、問題の歌の「恋の語らい」にはbと同じく修飾句がつい
ているのである。すなわち

b' 久しぶりに逢った「恋の語らいが終らないので、夜がふけて

ゆく。

久しぶりに逢った「恋の語らいが終らないのに、夜がふけて

ゆく。

となるのであるが、bで見られた現象がここでも見られるようであ
る。「久しぶりに逢った恋の語らいが終らない」のはあたりまえの
ことであるが、それを後者では「のに」と逆接条件にしているのは
あまりにも平凡と言えよう。

ところがa'では平凡であったはずの前者はそうでない。「久しぶ
りに逢った恋の語らいが(いつまでも)終らないので、夜がふけて
ゆく」のである。ほんとうに素直な表現といえよう。この前者こそ

が実は問題の歌なのであって、通説が後者のように解しているのは、「も……ねば」を逆接条件と見たゆえの誤りであろう。改めて順接条件として歌詞に即した訳をする。

一年にたった一夜、七月七日の逢う瀬の語らいはいつまでも終りそうにないので、夜が次第にふけてゆくことだ。

となるのである。一本の「(恋も) 尽きねばさ夜そ明けにける」にしても変りはない。「……語らいはいつまでも終らないので、夜が明けてしまったことだ」となるのである。

かくて通説が「も……ねば」を逆接条件に解した三首のうち二首まで消えたことになる。

五

残る一首、これは前にも挙げた歌であるが

さ寝そめていくだもあらねば白栲の帯乞ふべしや恋も過ぎねば

(巻十、二〇二三)

を取上げることにする。

諸注のほとんどは、この「も……ねば」を逆接条件と見て

寝そめていくらもたたないのに白栲の帯をよこせなどというべきでしょうか。まだ恋の思いが尽きませんのに、(日本古典文学

大系本万葉集三、九三ページ)

と解している。なかにあって土屋文明の万葉私注だけは

寝そめてまだいくばくもないのに、シロタヘノ(枕詞)帯を乞

ひ受けるべきではあるまい。恋もすぎないのであるから、(万葉

集私注第十卷、一四二ページ)

と順接条件に訳している。しかし、その私注すら語釈のところ、

「恋も十分満足されないものであるのに」と逆接条件に訳しているのは困ったことである。

今のばあい、順接条件・逆接条件のどちらに解しても意味が通らないことはない。それに末句を繰返しと見れば、「いくらもたつていないのに、恋の語らいも十分つくしていないのに、帯を乞うことなどどんでもないことです」となって十分納得のゆくものがある。しかし一面、末句を繰返しと見ないで、「ねば」で言いまして、あとは余韻として残していると見れば

……まだそれほど時間もたつていないのに、帯をよこせなどどもでもないことです。恋の語らいも十分尽していないのですから(おことばには従えませんが)となろう。

単調な通説に較べると歌としてふさわしい適当な複雑さも具えているのではないだろうか。それに「も……ねば」だけで逆接条件をあらわすとせられている三例中、他の二例の誤りであることが明らかになった以上、このばあいだけを積極的理由もないのに逆接条件と見ることに当らない。

かくしていえることは、「も……ねば」だけで逆接条件をあらわすばあいはないということである。

六

以上、「いまだ……ねば」説と、「も……ねば」説について比較検討した結果、「も……ねば」説が規則としての条件を欠いていることが明らかになったのであった。しかし正しいはずの「いまだ……ねば」には必ずといってよいほど「も」を伴っていることも事

実である。「も」を伴わないものはただ一例

見まつりていまだ時だに變らねば年月のごと思ほゆる君

(卷四、五七九)

があるばかりである。これとて「だに」を「も」に準じるものと考
えれば例外のないことになろう。しかし、この「も」またはそれに
準じることが法則に織り込む必要はないのではないだろうか。い
ずれにしても、その辺のことはわたしにはわからない。